

【vol.71】リディアン♭7thスケールの重要ポジション

どうも、大沼です。

今回は『リディアン♭7thスケール』についてやっていきたいと思います。

前回のテキストでも同じ様な話をしましたが、メロディックマイナー系のスケールは、一般的なロックやポップスの楽曲での使用頻度としては低いものです。

ですが時々、『これらを知らないとギリギリ対応できない』位の、少しの範囲(一部分だけとか)に、アレンジの関係で使う機会があったりするんですよね。

もちろんジャズやフュージョンでは当たり前を使うものなので、そういった事がやりたい人には、必修のスケールになりますが。

とりあえずこのテキストでは、必要最低限の範囲は学んでいきますので、今後の安全の為に、これらのスケールも覚えておくと安心して、夜、眠る事が出来ると思います。

それでは、やっていきましょうか。

今回のリディアン♭7スケールも、次回やっていくオルタードスケールも、メロディックマイナーを基本にしたモードスケールなわけですが、まず、そのモード全体の中で、どのスケールがどの位置(と言うか度数)に来るのか？そこから見ていきましょう。

※メロディックマイナースケールのダイアトニックコードとモードスケール

I mM7	メロディックマイナー
II m7	ドリアン♭2nd
♭III aug M7 (♭III M7(#5))	リディアン♯5th(リディアン・オーギュメント)
IV 7	リディアン♭7th(リディアン・ドミナント)
V 7	ミクソリディアン♭6th
VI m7(♭5)	エオリアン♭5(ロクリアン♯2)
VII m7(♭5) or VII7(♭5)	オルタード・ドミナント

と、メロディックマイナー上に構成されるダイアトニックコードとモード・スケールはこの様になっています。

赤字で示した部分がこのテキストで扱うものですが、チャーチモードやハーモニックマイナーのモードと同じ様に、上記全てのスケールは構成音自体は同じなので、1つのスケールをしっかりと覚えておけば、事実上、一応は全てのスケールを弾けるのと同じ事にはなりません。

ただ、上の一覧の中でも、比較的、使用頻度が高く、別個で把握しておきたいものが、今学んでいる3種、という事ですね。

前回のメロディックマイナーはA音トニックで覚えたので、Aメロディックマイナーの構成音を先ほどの一覧に当てはめるとこうなります。

※Aメロディックマイナースケールのダイアトニックコードとモードスケール

AmM7	Aメロディックマイナー
Bm7	Bドリアン♭2nd
CaugM7	Cリディアン♯5th(Cリディアン・オーギュメント)
D7	Dリディアン♭7th(Dリディアン・ドミナント)
E7	Eミクソリディアン♭6th
F♯m7(♭5)	F♯エオリアン♭5(F♯ロクリアン♯2)
G♯m7(♭5) or G7(♭5)	G♯オルタード・ドミナント

(※CaugM7はCM7(♯5)と表記されている事の方が多いかもしれません)

ちなみにカッコで表記してある名前は、意味が同じ別称か、構成音的にどちらとも解釈できる、と言うものです。

7度のコードが2種類あるのは、スケールの構成音的に、どちらも成り立つ、と言う話ですね。

では、前置きはこのくらいにして、実際のスケールポジションを見ていきましょう。

今回覚えるのは『リディアン♭7スケール』ですが、文字通り、

『リディアンスケールの7度の音を♭させた(半音下げた)スケール』

になります。

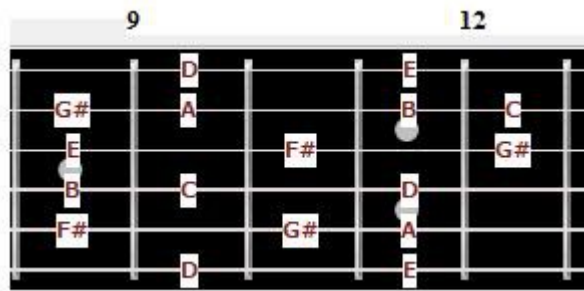
先ほどのメロディックマイナーを元にしたモード・スケールの一覧を見ると、このスケールが来るのは4度の位置ですね。

今回はAメロディックマイナーを基本にするので、構成音は、

tonic=A、M2nd=B、m3rd=C、P4th=D、P5th=E、M6th=F#、M7th=G#

となり、ここから、リディア♭7はD音をトニックに設定して弾いていきます。

図、Dリディア♭7スケール重要ポジション(6弦トニック)



メロディックマイナー系のスケールは、チャーチモードなどの他のスケールに比べて、音の配置にクセのあるものが多いのですが、ここはこの様に弾いてみましょう。

譜例、Dリディア♭7スケール重要ポジション(6弦トニック)

D7

mf

TAB

10-12 9-11-12 9-10-12 9-11 9-10-12-13 10 10-13-12-10-9 11-9 12 10-9 12-11-9 12-10

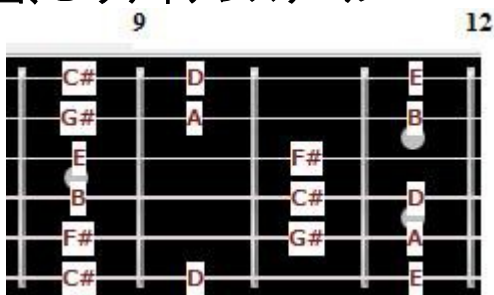
中小人薬小人中小 人薬人人薬小人 人小薬人人薬人小 中人小薬人小中

次に、リディア♭7スケール自体のインターバルは、

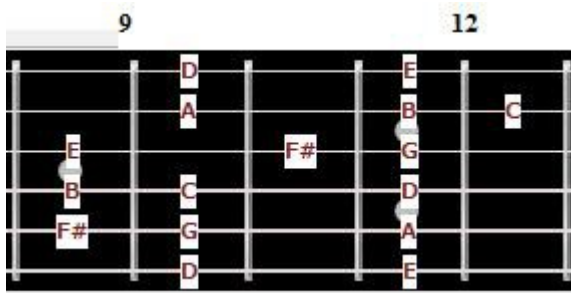
tonic、M2nd、M3rd、#4th(#11th)、P5th、M6th、m7th(♭7th)

となっていて、リディアンスケールと比べると7度が(M7th or m7th)、ミクソリディアンスケールと比べると4度(P4th or #4th)がそれぞれ半音違います。

図、Dリディアンスケール



図、D ミクソリディアンスケール



さて、先に載せたメロディックマイナーのモード一覧では、リディアン \flat 7のところにかっこで『リディアン・ドミナント』と言う呼称を載せましたね。

元々の、『ドミナント(Dominant)』という言葉の意味は『優勢な』とか『支配的な』と言う意味ですが、例えば『V7』の様な7thコードを『ドミナント7th(コード)』と呼ぶように、音楽の中では、結構、強制力のある存在なわけです。

V7のコードは、それが鳴ると、1度のコード(I M7やI m7)に進みたくになりますし、そのV-I(ファイブ・ワン)の流れ(コード進行)を見て、その楽曲の調性(keyやトータルセンター)を判断したりします。

他にも、「トニック、ドミナント、サブドミナント」と言った、ダイアトニックコードの分類や、「ドミナント・モーション(強進行)」、「セカンダリー・ドミナント」などそういった、音楽全体に影響力の強いものに『ドミナント』の名称が付いていたりします。

で、リディアン \flat 7thスケールから構成されるコードはIV7(ドミナント7th(系)のコード)なので、別の呼び方として『リディアン・ドミナント』と言う名前も存在している様です。(※そもそもリディアン \flat 7thスケール自体「ドミナント系のスケール」と分類されますし)

ちなみに、「~している様です」と言った曖昧な説明しか出来ないのは、この「ドミナント」と言う言葉が付く対象を、はっきりと定義している書籍や情報が、今現在、僕の調べられる範囲にはどこにも無く、この言葉が使われている状況を見て説明するしかないからです。

もしかしたら、クラシックの学術書などを探せば、どこかに定義が載っているのかも知れませんが、おそらく、音楽家や音楽の研究者が、「ドミナント」と言う言葉を、概念の説明の為に広義で使っていく内に、リディアン・ドミナントと言う呼び方が、世の中に定着したのではないかと思います。

(※これについては確証がないので責任は取れませんが)

話を戻しますが、リディアン♭7から構成されるコードはドミナント7thのコードなわけですが、元々、ドミナントのコードは、5度の位置に来る、1度のコードへ向かおうとするコードの事をそう呼んでいましたね。

次に、Aメロディックマイナーを基本にした場合、4度の位置に来る、Dリディアン♭7から成り立つD7(IV7)のコードですが、4度のコードは、キーの観点から見ると、本来はサブドミナントのコードが来る場所です。(メジャーキーでもマイナーキーでも)

(※key=Amの場合、基準スケールはAナチュラルマイナーで4度のコードはDm7(IVm7))

ですが、Amキーの楽曲だとしても、どこかでD7を使った後に、D7に対しての1度のコード、即ちGM7やGm7などに進んだりすると、D7はドミナント7thの役割になるんですね。(※実は1度のコードに向かわなくてもドミナント7thと分類するのですが・・・)

まあとにかく、こういった事から、ドミナント7th係のものに関連することから、『リディアン・ドミナント』と言う名称があるのだと思います。

この辺りは、M3rdとm7thを含むスケールを『ドミナント系のスケール』と分類するので、そこから来ているのかも知れませんが、何が先なのかがわからないので何ともいえません。

音楽の歴史のどこかの段階で、音楽大学の先生みたいな人が、そう決めたのかも知れませんが。

さて、なにやら小難しい話をしましたが、この辺りの考え方は「セカンダリー・ドミナント」の類の話になってくるので、詳しくは今後どこかでやっていきたいと思っています。

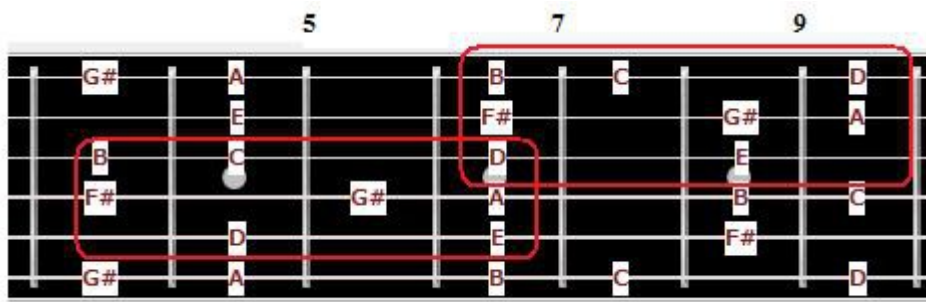
現時点では、『X7のコードはドミナント7th、そこではドミナント系のスケールを使う』と言ったザックリした把握でOKです。

と言う事で、今回の本題に戻りましょうか。

先ほど、リディアン♭7の6弦トニックのポジションをやったので、次は5弦にトニックを見たポジションですね。

ポジションの見方としては、前回メロディックマイナーの時と同じ、1オクターブで区切るような方法でやっていきましょう。

図、Dリディアン♭7スケール重要ポジション(5弦トニック)



弾き方も前回と同じ様な感じです。

譜例、D リディアン♭7スケール重要ポジション(5弦トニック)

3弦上で1オクターブのポジションを移動する時はスツとスムーズに切り替えます。
(※もちろん練習として、通して弾こうとせずに1度区切っても構いません)

スケールのインターバルと指板上の音の配置をリンクさせるような感覚で練習しましょう。

こういったスケール練習の様な、複数の要素が混在しているトレーニングは、量も大事ですが、まずは1回辺りの練習の質を高める事に注力しましょう。

重要なポイントは、このテキストをずっと続けている人には、もう耳タコかもしれないですし、当たり前と言えは当たりの話なんですけど、とにかく集中して、焦らず、じっくり、丁寧に弾く事です。

指板上のポジション(視覚的な音の並び)、各音のインターバル(度数)、そのポジションを弾いている時の手の動き(感覚、感触的なもの)といった、それぞれの要素を結びつける様に頭と身体の両方をフルに使って覚えていきます。

1回の練習の中で、1つのポジションを弾く回数は、少ないよりは多いに越した事はありませんが、本当に丁寧にやっていたら、1日1~3回程度弾いているだけでも、3日もすればある程度は普通に暗記できていたりしますので。

この様なポイントに気をつけていれば、練習を始める前に想像していたよりも、かなり早い段階でポジションを覚えている事に気がつくと思います。

さて、と言う事で、今回は以上になります。

本当はオルタードスケールもこのテキストでやるつもりでしたが、思いのほか分量が多くなったので、次のテキストに回したいと思います。
(※暗記モノは一度に沢山やるのも大変です)

ではまた次回。

ありがとうございました。

大沼